

## 令和3年度 調布市教育シンポジウムの報告について

- 1 日時 令和4年1月29日（土）午前10時から午前11時45分まで  
YouTubeによるライブ配信（現在、オンデマンド配信中）
- 2 場所 調布市文化会館9階研修室から配信
- 3 テーマ 一人一台端末を活用した個別最適な学びへの挑戦
- 4 視聴者 1734名（3月11日時点）
- 5 内容

## (1) 調布市の取組

## ○一人一台端末による効果

一人一台端末は、令和の学びの「スタンダード」となり、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、個別最適化された教育環境を実現することができる。

## ○市における取組

- ・児童・生徒用端末配備状況 小学校（iPad）12,050台、中学校（chromebook）4,650台
- ・ICT支援員の配置
- ・プログラミングソフトの導入  
小学校 低学年用にソビーゴ、中学年用に scratch, 高学年用に MESH, その他 Viscuit  
中学校 micro : bit
- ・授業支援ソフト（小・中共通）

## 【ミライシード】

インターネットから必要な情報を取り出したり、カメラで撮影したり、様々な方法で表現できる。また、クラスの他の児童・生徒の意見や作品を見ることができるため、全体やグループでも協働的な学習として取り組むこともできる。

## 【Google Workspace for Education】

ビデオ会議や文書作成、プレゼンテーション資料作成等児童・生徒がそれぞれの端末から同じ資料に協働して作業することもできる。

- 令和4年度は、通常の授業での利活用やオンライン授業など、多くの実践を行う「拡大型」から児童・生徒の個々の資質・能力を最大化する指導方法の開発へ向かう「普及期」へ移行していく必要がある。活用方法の実践共有の場と指導方法の質の向上を目指していく。

## (2) 実践報告

## ①通常の学級における授業（オンライン授業）の実践

調布市立第三小学校 主任教諭 三好 雄太

## ②不登校特例校における実践

調布市立第七中学校 はしうち教室 主幹教諭 吉田 由美子

## ③特別支援学級における実践

調布市立第一小学校 主任教諭 武井 茂樹  
主任教諭 千葉 喬史

### 【内容】

- ① 9月のオンライン授業の実践報告
  - ・ Meet を用いて、スライド、黒板、オクリンク等を活用した授業実践を重ね、校内で共有した。そのため、様々な形での授業に対応することができた。
  - ・ 成果は、考えの共有をするのが容易、比較・分類・整理がやりやすい、個々の理解に合わせた課題提供ができる。
  - ・ 課題は、通信環境によって画面が荒くなってしまう、通信量に上限がある、児童同士の交流が難しいことである。
- ② 不登校特例校における実践報告
  - ・ 口頭での表現が苦手な生徒も、ICT機器を使うことで表現することができた。
  - ・ 集団が苦手な生徒でも、自宅や別教室から授業に参加して学びに向かう姿勢が依然よりも増した。
  - ・ 手書きと入力の選択ができるため生徒の学びに向かう姿勢に変化が見られた。
- ③ 特別支援学級及び通級指導教室における実践報告
  - ・ 書くのが苦手な児童も会話を文章にするアプリを活用することで、表現力が向上した。
  - ・ 協働的な活動もタブレット端末を通して行うことで、参加する姿勢に変化があった。
  - ・ 個別に聞き取り支援や語彙補充を、タブレット端末を通して行うことができた。
  - ・ コロナ禍で学校移動が難しくても、オンラインで指導することができた。

### (3) 基調講演

講演「一人一台タブレット端末の教育活動への効果的な活用について」

講師 帝京大学 金森 克浩 教授

### 【内容】

- ICT機器は、特別支援教育の視点からも重要な道具である。
- 合理的配慮の基礎となる環境整備により、提供される合理的配慮が異なる。
- ICT機器の活用では、苦手なことを克服するための支援だけにとどまらず、得意なことを伸ばしていく視点をもつことが大切である。
- ICT機器により、学びの手段を保障することが可能となった。
- 変化の激しい社会の中、AIが得意なこと、人間が得意なことを整理しながら、これからの学びについて考えていく必要がある。
- 特別支援教育のICT活用の3つのポイントとして「①社会参加の自立」「②コミュニケーション支援」「③学びの楽しさを知ること」があり、主体的・対話的で深い学びに結び付けていくことが大切である。

#### (4) アンケート結果 (Google Formsによる)

##### 1 主な感想・意見

- ①学校での活用など、もっと知る機会がほしい。
- ②ICT機器の利活用をよりよくするために、ICT機器だけでなく、児童・生徒の特性に応じた教育ニーズへの理解を教職員と共有し、互いに支えあえるような環境づくりが必要であると感じた。
- ③特別支援学級の実践のなかに通常の学級で使えるような事例がいくつもあった。オンライン授業になった際にできることや活用方法、メリット・デメリットなどが分かった。
- ④公正に学べる機会をすべての子どもたちに与えられる環境が整ってきた。学習することの意味を考え直すことができた。
- ⑤ICT機器の活用を目的ではなく手段としてどのように活用しているかを、実践内容を通じて把握することができた。
- ⑥市内での取組状況が分かり、はしうち教室への進学を選択肢の一つとして考えているため非常に参考になった。
- ⑦ICTの使い方によって、いろいろな学びの方法があり一人一人にあった活用ができる。
- ⑧市内ではハイブリッド授業が開始されたが、帯域不足の関係か、各クラスでの個別配信が不可能となり、学年の特定のクラスの授業を配信する形となっている。ICT機器の有効活用が有益であると思うが、そのためのICT基盤整備が必要と感じており、各学校の先生方が様々考えてくださり、工夫してくださっているご努力を無駄にしないことが大事だと思う。ICT環境の不備で無駄な手間や施策の断念が生じることがないように、回線強化等、どんな施策実現にも支障のないICT基盤整備に予算を投じて欲しい。
- ⑨教員の負担が増してしまうのであれば専門職員の増員を図るなど、体制強化もお願いしたい。市の予算に限りがあると思うが、教育への投資は市の未来への投資でもあると思うので、投資への賛同も得られるのではないかと考えている。
- ⑩プレゼンテーションが投影された画面を撮影する形だったので、全ての発表において不鮮明でよく分からなかった。
- ⑪発表内容が保護者の立場として難しく感じた。保護者としては分からない言葉も多くありました。
- ⑫タブレット端末は小学校の児童にとって負担。6年生で中学に入る前の操作準備として操作教育をしていくべき。小学校の5年生以下で半数の児童はデジタル教育にはついていけない。家にいる児童のタブレット端末の横には仕事を休んだ母親が子供の操作を手伝っている。
- ⑬特別支援学級での活用については、支援ツールとなる。
- ⑭手書きでノートを取ることで脳が活性化されて学習能力が上がるが、タブレット端末では学習能力成績は下がる。手を動かすということは成績だけでなく、頭脳の成長にとっても大切である。
- ⑮金森先生の講演では、子どもに対し何を提供すべきかを改めて考えるきっかけをいただいた。
- ⑯金森先生の「苦手を頑張るではなく得意を伸ばす」「学びの『手段』を保障する」という言葉が印象に残りました。

##### 2 教育委員会としての見解

オンライン授業や日常の授業での実践から、コロナ禍におけるタブレット端末を活用した個別最適な学びに向けた取組について、広く市民に伝えることができた。また、金森先生の講演では、特別支援教育の視点からICT機器をどのように活用していくのかについて教授いただいた。

ただし、意見にもあるように、シンポジウムで紹介した内容は、教員には分かる言葉を使っていることもあり、保護者の視聴者には、理解できない部分があったことは課題である。また、スクリーンに撮影したものを撮影し配信したことで、見えにくい部分があったため、伝わらなかったと考えられる。来年度は映像シアターを会場とするなど、配信環境の改善を図る。

今後、一人一台端末の活用の充実にに向けた取組を行っていかねばならない。全教員が「できることを実践していく」姿勢を持つとともに、児童・生徒の資質・能力の育成のための道具として効果的な活用ができるよう、実践が共有できる環境を整備するとともに、活用方法について指導・助言を行っていく。